

新物語
今昔物語 第25話

大東ふるさとカルタに見る地域遺産⑫
「開発の歴史を語る」
会所跡



当初、大和川は北西に流れていました。宝永元年（1704）の大和川付け替えにより、各地で新田開発が行われるようになり、市域でも深野池などがその対象となりました。

などのほか、広い土間や居室、書院などからなる母屋、さらに瓢箪形の池を持つ庭園などもありました。また、享保13年（1728）に大坂市中より勧請された坐摩神社は、現在では地域の氏神として鎮座しています。

市域での新田開発は、付替え前にも明暦元年（1655）に八箇村新田、元禄11年から15年（1698～1702）にかけて尼崎新田などが開発されていきましたが、付け替え後は東本願寺難波別院が、深野池を宝永2年（1705）から正徳3年（1713）の9年をかけて開発し、その開発規模は約3.2平方町で市域の約17%にも及びました。

市域および周辺には平野屋新田会所のほか、深野新田会所、毛受会所、東大阪市域の鴻池新田会所などがありました。現在では鴻池新田会所が現存する唯一のものになりました。そのため、教育委員会では後世にも江戸時代における市域の開発の歴史を伝えていくため、平野屋新田会所跡の特徴的な建物である千石蔵跡、道具蔵跡、また船着場跡について保存を図り、広く活用・公開していくことを計画しています。（生涯学習課）

その結果、深野新田・深野南新田などの多くの新田が誕生しましたが、これらの新田経営の優先機関として会所と呼ばれる建物が設置され、その一つに深野南新田・河内屋南新田を管理・運営していた平野屋新田会所がありました。平野屋新田会所は、深野南新田が正徳5年（1715）、河内屋南新田が享保6年（1721）に平野屋又右衛門に譲渡された際に設置されたもので、その敷地には船着場や千石蔵（米を納めた蔵）



保存・活用される千石蔵跡・道具蔵跡・船着場跡

新物語
今昔物語 第26話

大東ふるさとカルタに見る地域遺産⑬
「石段を数えて登る」
観音さん

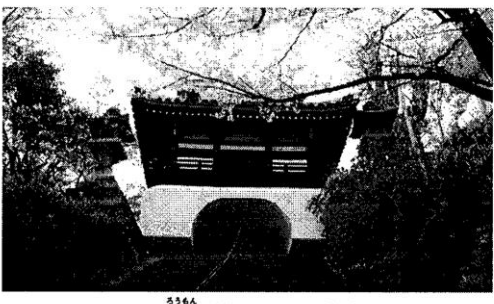


野崎観音は、正式には「福聚山慈眼寺」という曹洞宗のお寺です。寺の由来では奈良時代に来朝したインドの僧に「野崎の地は釈迦が初めて仏法を説いた鹿野苑によく似ている」と言われた行基が、白樺で十一面観音像を作り、この地に安置したのが始まりとされています。

野崎観音は、近松門左衛門の「女殺油地獄」、近松半二のお染・久松の心中を扱った「新版歌祭文」の作品や上方落語の「野崎詣り」、そして特に昭和10年（1935）に流行った東海林太郎の「野崎小唄」によって全国的にも知られるようになりました。現在も「野崎参り」の行事は盛況で、毎年5月1日から8日にかけては出店が並び、多くの人々で賑わいます。（生涯学習課）

平安時代の中頃には中興の祖と呼ばれる江口の君が広大な伽藍を建て再興しましたが、戦国時代の永禄12年（1569）、松永久秀により本堂など寺の全てが焼失したとされています。

その後は小さなお堂で営んでいたとされていますが、宝永5年（1709）に鑄造された寺の梵鐘には、江戸時代の初めに青巖和尚によつて復興が始まり、4世の嶺南和尚、5世の大真和尚によつて成し遂げられていくことが刻まれています。特に、大真は旧暦の4月1日から10日の間、無縁経の法会を営み、当時は秘仏であった十一面観音の公開も行ったことから、参詣者がますます増えるようになり、それは後に庶民の間で流行する「野崎参り」のきっかけになったとも考えられています。



山門（楼門）【宝暦9年（1759）】建立